

実践

1

自分の学習を「モニタリング」して、学習を自己調整する力を高める

—「魅力効果的に伝えよう—鑑賞文を書く」（二年）

埼玉大学教育学部
附属中学校教諭
廿樂裕貴



「感覚を言葉に—名画の鑑賞文を書こう」（二年・全四時間）

授業の流れ

一時間目

- ・鑑賞文のモデル（教師作成）を読み、学習の見通しを立てる。
- ・美術の教科書や画集から好きな名画を選び、鑑賞の観点を明確にする。

二・三時間目

- ・適宜インターネットの類語検索や連語検索を行いながら、ノートパソコンを使い、鑑賞文を書く。

四時間目

- ・鑑賞文を印刷し、互いに読み合う。
- ・特に表現の工夫が感じられたところを指摘し合う。
- ・単元を振り返る。

【評価規準】

- ・類義語と対義語などについて理解し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。

【知・技(1)E】

- ・「書くこと」において、表現の効果を考え、描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫している。

【思・判・表B書く(1)ウ】

- ・粘り強く語感を磨き、語彙を豊かにし、学習の見通しをもって、鑑賞文を書くこととして

【主体的に学習に取り組む態度】

本単元では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を、特に類義語などに着目して語彙の量や質を獲得しようとしている姿で見取ることに

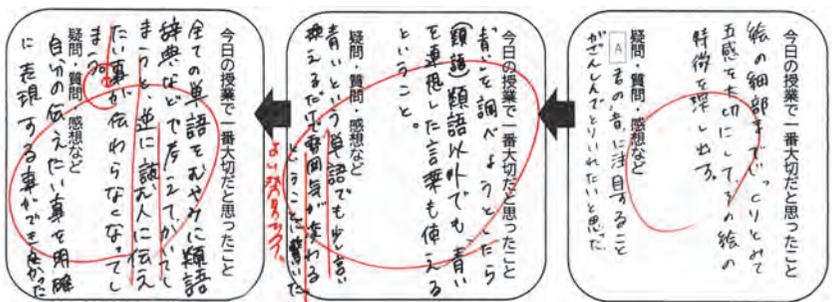


図1

ります。

次の三時間目では「全ての単語をむやみに類語辞典などで考えてかいてしまうと、逆に読む人に伝えたい事が伝わらなくなってしまう。」と記述しています。

鑑賞文を読む相手を意識しながら、目的をもって類語を使用することを

鑑賞文の読み手への配慮も高まっていることがわかり、応用の意識が見られたことから、「十分満足できる」状況(A)としました。

このように、生徒が「自己評価」の記述を見返しながら振り返りを行うことで、「主体的に学習に取り組む態度」を評価することができ、それが効果的な資質・能力の育成に寄与していることがわかります。「疑問・質問・感想など」の欄の記述は任意ですが、一時間目の記述からは、他の生徒の気づきや語彙についての発見などについて言及し、次時に向けて自らの学習を改善していこうとする姿勢が見取れます。教師はOPPシートを回収し、線を引いたり、短いコメントを付したりしてフィードバックを行いました。授業内では、個人の疑問や質問を取り上げて全体で課題を共有する場を設定するなどして、生徒の学習改善につながるように意識しています。なお、国語科のOPPシートには、「この単元で言葉について学んだことを書こう」という欄を継続して設けることで、その時々という言葉についての認識を自覚させ、生徒自身の言葉による見方・考え方が高まっていくようになっています。

この大切さを発見できたことが見て取れます。ここから、粘り強く類語を収集し、文章の中で使おうとしていることと、試行錯誤しながら類語の適切な使用のしかたについて考えようとしていることが認められるため、「おおむね満足できる」状況(B)と判断しました。さらに、

しました。一つの文章の中で、同じ単語を重複して使用する生徒が一定数見受けられたからです。そして、「知識及び技能」を習得するために、自らの学習状況をモニタリングし、学習の進め方を試行錯誤するなどして学ぼうとしているかどうかを把握することにしました。

ここで活用するのが、一枚ポートフォリオ(One Page Portfolio sheet 以下、OPPシート)です。こちらを使用して、生徒が自らの学習を自己評価できるようにしました。授業の各回の最後に「学習履歴」として、「今日の授業で一番大切だと思ったこと」を問うようになっています。

図1は、「青い朝顔、ニューメキシコII」(ジョージア・オキーフ)という名画を選んだ生徒のOPPシートの一部です。この生徒は、つけたい力である、語感を磨き語彙を豊かにすることに、類語や連想語に注目して、自らの学習を自己評価しています。

二時間目では「類語以外でも、青いを連想した言葉も使えるということ。」とし、「青」という単語の言い換えだけでなく、「青」を連想させる言葉を用いることで、自分の伝えたいことを印象深く伝えられることに気づいたのがわか

一瞬で見物人をこの絵に引き込む、凛としてたくましくも見える二輪の花が、何と書いてるのが、鮮やかに発色している瑠璃色だ。使われている色の種類は少ないからこそ、瑠璃色の濃淡を変え朝顔を巧みに引き立たせている。そればかりか、絵に統一感を出すように背景の色も空色がかったものになっている。しかし、花の影になる部分は紺色だ。徹底的に青で勝負する作者の意図がうかがえよう。(略)

言語活動中に自分の学習をモニタリングする。この機会の有無が、生徒の主体性を大きく左右するでしょう。新学習指導要領全面实施から半年が過ぎました。目の前の生徒が「主体的に学習に取り組む」んでいる姿とはどういったもので、それはどのようにすれば伸ばすことができるのか。さまざまなアプローチを試しながら、いっしょに考えていきましょう。

〈参考文献〉『新訂一枚ポートフォリオ評価OPPA 一枚の用紙の可能性』(堀哲夫 東洋館出版社・二〇一九年)

実践
2

ICTを活用した
学習評価の工夫

「メディアを比べよう」(二年)

お茶の水女子大学
附属中学校教諭
わたなべ こうき
渡邊 光輝



「メディアとの上手な付き合い方」
「デマを捕まえる」(二年、全七時間)
授業の流れ

【一時間目】
・「自分で考える時間」をもと(教科書一年P64)を通読し、感想を書く。
↓内容確認小テストを行う。

【二時間目】
・メディア(テレビ・新聞・インターネット)の特性をスプレッドシートに整理する。

【三～五時間目】
・四人グループでデマについて分析し、スライドを共同制作する。

【六時間目】
・個人で「メディアとの付き合い方三か条」とその解説を考える。

【七時間目】
・ゲストティーチャー(元新聞記者)による特別授業(オンライン)。新聞記者の「メディアとの付き合い方三か条」。
・四クラスの「三か条」を読んだのコメントと授業者との対話。

【評価規準】

情報の信頼性の確かめ方を理解し使っている。

【評価方法】 内容確認小テスト、メディアの特性をまとめたスプレッドシート、定期テスト
・「読むこと」において、目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得て、内容を

「知・技三年(2)イ」

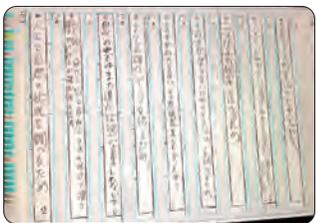


図2 デジタル採点ソフトの採点画面

定期テストの採点はデジタル採点ソフト(図2)を使っています。このソフトは紙の解答用紙をスキャンし、設問ごとに切り取って、同

するまで、何度もチャレンジしていました。教師は、間違いの多い解答の傾向をつかみ、授業に反映させました。
【思考・判断・表現の評価事例】
「メディアとの付き合い方三か条」と解説を書く
「三か条にまとめ、その解説を書く」というパフォーマンス課題を設定し、Google^{*2}クラスルームを使って提示しました。課題には、「ルールブック」を設定することができました。四段階の評価規準を生徒に提示し、それを参照して、これまでの学習を踏まえたまとめを作成しました。Google^{*}クラスルームを使えば、全ての生徒が作成しているデータが同期され、教師もリアルタイムで課題の作成状況を見ることが出来ます。授業時には、文章にまとめていく過程を捕捉しながら、行き詰まっている生徒に適宜個別指導を行い、ヒントを与えるなどの支援をしました。簡単な注意やアドバイスも、その場になくてもコメントで書き込むことが出来ました。

*2 オンライン学習システム。クラスの管理や課題の作成、共有などが可能。

【定期テストでの評価事例】
デジタル採点ソフトの活用

一の問題を一気に採点することが出来ます。記号問題は文字認識で採点可能ですが、記述問題については、一つ一つ目視で採点する必要があります。ただし、同じ設問の答えが並べられるので、複数の生徒の解答を見比べながら採点することが出来ます。採点後には、どの問題ができて、どの問題は不正解であったのか、データとして集約されます。設問ごとに全体の傾向を捉えることができると同時に、個別にも解答状況をつかみ、支援することが可能です。

ICTができること、できないこと

ICTの長所として、次のようなことが挙げられます。

- ① オンラインテストの自動採点など、データ処理の省力化・自動化が図れる。
- ② データの集約機能により、個人単位でこま

解釈している。「思・判表(読む(1)イ) 評価方法」デマについての調査、定期テスト
・メディアとの付き合い方について、積極的にその特性を踏まえて、情報を適切に吟味するための具体的な手立てを考え、今後に生かそうとしている。「主体的に学習に取り組み態度」
【評価方法】 「メディアとの付き合い方三か条」

ICTを活用した評価の工夫

【知識・技能の評価事例】 内容確認小テスト

文章の理解度を確認する小テストでICTを活用しました。Google^{*1} フォーム(図1)で問題を作成すると自動採点され、即座に結果が示されます。何度も繰り返し問題に挑戦することが可能なので、テスト本番まで、事前に問題を解くことができ、状態にしておき、練習に取り組みました。ただし、練習用の問題では採点結果のみ表示し、模範解答は伝えません。生徒は全問正解

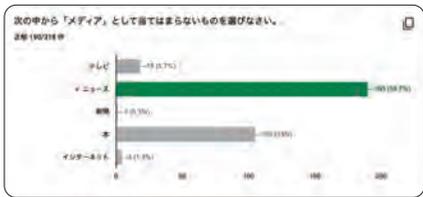


図1 Google フォームの集計

*1 アンケートフォームなどを簡単に作成できる無料ツール。

かな情報が収集できる。

- ③ 全体の傾向も簡単に捉えることができる。
- ④ Google^{*} クラスルームなどを使ったデータ共有により、生徒の学習状況をリアルタイムで捉え、支援できる。

ICTを活用することで、これまで以上に個性に応じた学習状況の把握や支援をすることが可能になります。ICTはあくまで「見たいものを見る」「集めたいデータを集める」ときに見、威力を発揮するツールです。生徒がパソコンに向かってキーボードをたたいた「結果」を、効率的に把握することが出来るツールにすぎません。「キーボードをたたく前」の生徒の思考や資質・能力は、どんなツールでも捉えることは不可能でしょう。

このようなICTツールの効果と限界をよく理解したうえで、どのような切り口で学習課題を設定し、どのように学習状況を捉えて支援をし、どう観点を設定し価値づけして評価をするか、これまで以上に綿密に評価規準や評価方法を吟味することが必要となるでしょう。また、集められたデータの解釈も含む、教師の見取りの精度が求められると考えます。さもないければ、ツールに振り回されることにもなりかねません。